

師走に入り、オホーツク海の各種漁業もほぼ終漁しました。今年のオホーツク総合振興局管内の漁業生産は、昨年と比較して、ホタテガイはほぼ同様の漁獲量でしたが、タコ、ニシン、ブリが160～170%と増加しました。しかし一方で、サケ、スケトウダラ、イカは70～75%、ホッケは約35%と大きく減少し、全漁獲量は対前年比85%となる見通しです（オホーツク総合振興局調べ。いずれも暫定値）。これらの魚種の中で、近年全道的に漁獲量が増加しているブリについては、オホーツク管内の平均単価は約120円/kgと全道平均（約260円/kg）の半分以下となっており、付加価値向上対策が今後の課題となっています。

▼さて、網走水試が毎年主催している「ホタテガイ担当者会議」を先週（12/8）開催しました。今年はオホーツク、宗谷、根室管内の漁協、水産技術普及指導所等でホタテガイ漁業の指導等を担当する31名の方々に出席して頂きました。会議では、網走水試のほか、会場と共同で調査研究を実施している中央水試、工試、熊本大学からこれまでの調査研究の成果や進捗状況、水産技術普及指導所から今年のオホーツク海での採苗状況、各漁協からホタテ生産状況などについて報告があり、ホタテガイ漁業に係わる情報・意見交換が行われました。

▼調査研究の成果等では、網走及び中央水試から「乾貝柱製品の品質向上」、「ホタテガイ成長モニタリング」、「ホタテガイの外海採苗・幼生出現と海洋環境」について報告し、出席者からは「貝柱へのグリコーゲン蓄積は、貝の年齢によって差はあるのか？」、「春から夏にかけて漁場で観察される水温低下はオホーツク海中冷水の影響と考えて良いか？」、「採苗時期に中冷水が入った場合、どのタイミングで採苗器を投入したらよいか？」などの質問が出されました。また、今年度から開始した「海底画像による資源量推定技術実用化試験」に関する進捗状況の報告（網走水試、工試、熊本大学）に対しては、「撮影動画を無線でリアルタイムに船上のモニターに送信する技術は無いか？」、「速い船速（3ノット以上）に対応した画像撮影は可能か？」などの質問等が出されていました。

▼今年の採苗状況については、水産技術普及指導所から「春先の低水温により、浮遊幼生の出現時期が遅れたが、最終的には付着数は十分確保できた」、一方で「低水温により付着稚貝の成長が遅れた」等の報告がありました。また、生産状況は「昨年の取り残しが多く、生産計画はほぼ達成できた」、「オホーツク海北部では春先に植物プランクトンの増殖（ブルーミング）が観察されたが、ホタテの成長には結びつかなかった」、「秋を過ぎても貝柱歩留まりの大きな低下は見られていない」など各浜の状況について情報提供されました。

▼この他に、網走水試等が来年度から実施を検討している「ヒトデ類による地まきホタテガイの捕食実態解明」や「地まきホタテガイ漁場におけるアカボヤ駆除と有効利用を目指した基礎調査」などの概要説明も行いました。網走水試では、今後とも「ホタテガイ担当者会議」を継続的に開催し、オホーツク海沿岸におけるホタテガイ漁業生産の安定と向上に向けた情報や調査研究成果の共有と人的ネットワークの形成を進めたいと考えています。